

# 『赤い鳥』時代の茨城県西部の文化環境 —童謡が隆盛した背景—

加藤 理\*

## Cultural Environment in Western Ibaraki Prefecture during the “Akaitori” Era: Background of Nursery Rhymes

Osamu KATO

**要旨** 『赤い鳥』が創刊された大正時代は、『赤い鳥』の他に『おとぎの世界』『金の船』『童話』などの児童文芸雑誌が次々に創刊されるが、それらを手にした子どもたちはごく一部にとどまっていた。多くの子どもたちは、貧困な生活の中で、貧困な文化環境を強いられ、童謡や童話と無縁の生活を送っていた。そうした時代の中で、投稿欄に多数の作品が掲載されて注目されたのが茨城県である。特に、県西部の小学校の児童の作品は、多くの雑誌を席卷した。そこで、なぜ茨城県の子どもたちが童謡などの芸術的児童文化に接することができたのか、文化環境を分析し、茨城県西部で童謡が隆盛した背景を中心に考察する。

**キーワード:** 『赤い鳥』 童謡 茨城県西部 石下自由教育 粟野柳太郎

### はじめに

1918年（大正7）7月『赤い鳥』の創刊を機に、童謡、童話、児童劇、自由画などの児童芸術運動が全国的に隆盛し、全国の子どもたちは児童芸術に親しむようになったと言われてきた。

あたかも全国津々浦々の子どもたちが児童芸術を享受していたかのように思われがちだが、美しい童画が表紙を飾り、童謡、童話が紙面を彩る雑誌を手にした子どもは、ほんの一部でしかなかったことにも目を向けなくてはならない。

1926年（大正15）に千葉県女子師範学校を卒業後、千葉県袖ヶ浦の長浦尋常高等小学校に赴任し、子どもたちとの学校生活を克明に記した『女教師の記録』を残した平野婦美子（旧姓佐久間）は、教科書以外の一冊の本すら持っていない子ども

たちの状況を前に、「雑誌といふ言葉にすら接した事のない子供達」の文化環境に衝撃を受けた様子を記している<sup>1)</sup>。

『赤い鳥』のような芸術的児童文芸雑誌を手にならなかった子どもは、雑誌という言葉すら知らなかった農山漁村の子どもたちだけではない。都市に住む子どもでも、これらの雑誌を手にした子どもは決して多くはなかった。

1912年（明治45）生まれの児童文学者関英雄は、5年生の時、2階の下宿人の早稲田の学生から、「英雄ちゃん、こういう雑誌もたまに読むといいよ」と『赤い鳥』を紹介される。その後、6年生の担任が、綴方の時間に児童に童謡を作らせる。そして、「みんなが見たこと感じたことなら何でもいい、歌うようなきもちで、なるべくみじかいことばであらわすんだ」と言い、できた者から順に教壇の先生のところに用紙を持って行って

\* かつう おさむ 文教大学教育学部教職課程

丸をつけてもらう。だが、教室での童謡講座はその時一回限りで、『赤い鳥』の話を先生から聞いたこともなかった。そうした教師が担任をしていたためであろうか、「山の手の比較的優秀な生徒を集めた江戸川小学校六年東組の中で、『赤い鳥』に関心を持っていた子どもは、わたしくらいだった」と関は回想している<sup>2)</sup>。

『赤い鳥』のような芸術的児童文芸雑誌を手にした子どもに限られる中で、『赤い鳥』をはじめとする児童文芸雑誌の童謡、自由詩、綴方の投稿欄に児童の作品が大量に掲載され、全国的に注目された地域に、結城郡と真壁郡<sup>3)</sup>などの茨城県西部がある。

そこで、本稿では、茨城県西部の文化環境を中心に、この地域の子どもたちがどのようにして『赤い鳥』などの文化に接することができたのかを確認する。

## 1 茨城県西部の生活と『赤い鳥』

『赤い鳥』の童謡・自由詩投稿欄の選者となった北原白秋は、投書がなかったところから次第に応募童謡が山積みになるようになり、新童謡運動の機運が醸成されるようになっていったことを述べ、児童の投書も増えたことから児童作品欄を設けるようになった過程を『鑑賞指導 児童自由詩集成』の中で説明している。そして、児童の作品の投書に関して次の様な見解を披露している<sup>4)</sup>。

その後個人の投書よりも、各小学校の一括した投書となつて激増し、気運が追々に私の思ふところに向つて来た。之等の参加小学校中、揺籃時代に於て最も光輝ある成績を挙げたのは山

梨・長野・千葉・茨城の諸学校であつたことは、如何にそれ等の地方が進取の氣に富み、時代の芸術教育に共鳴するところ多かつたかを十分に物語る。

白秋が挙げた4県の中に茨城県が含まれているが、『赤い鳥』を契機に童謡運動が盛り上がった大正10年前後の茨城県、特に結城郡と真壁郡を中心とする県西部は、子どもの創作童謡の全国的な中心地の感を呈していた。

茨城県での童謡運動の盛り上がりを示す事例に、カルピスが企画した全国の小学校からの童謡・自由詩の懸賞募集がある。ラクトー株式会社(現カルピス)は、1923年(大正12)1月、「日本童謡の国際運動」と題して北原白秋、西條八十、野口雨情、葛原齒を選者に全国の小学校から童謡・自由詩を懸賞募集する。全国からの応募総数は23,760作品で、応募数の上位県は表1のとおりである。

表1 県別童謡・自由詩応募件数

順位	県名	応募数	順位	県名	応募数
1	東京府	1362	6	山梨県	757
2	香川県	1050	7	千葉県	685
3	茨城県	1032	8	愛知県	631
4	静岡県	959	9	福島県	604
5	埼玉県	851	10	滋賀県	577

茨城県からの応募数が多かったことが確認できるが、茨城県で注目すべきことは、応募数の多さだけではない。4人の選者それぞれが選んだ入選作品作者は表2のとおりである。

表2 選者別入選作作者

	北原白秋	西條八十	野口雨情	葛原齒
1等	高橋正(茨城・水海道小4)	塚谷一夫(東京・鮫ヶ橋小5)	荒井貞子(茨城・若柳小6)	塚本節子(東京・中之町小2)
2等	和田初穂(東京・渋谷小4)	木島重司(千葉・長柄小6)	篠原新一(山梨・多摩小3)	今井尚幸(千葉・高2)
2等	村野儀一(東京・多摩小4)	吉原勝(茨城・五箇小4)	小野ヨシイ(新潟・黒川小5)	大塚太郎(大阪・長尾小6)

計12人の入選者のうち、東京府の児童が4名、茨城県の児童が3名、千葉県の児童が2名、山梨県、新潟県、大阪府の児童がそれぞれ1名となっている。ラクトー株式会社が募集した童謡・自由詩の入選者からも、茨城県が童謡・自由詩の盛んな地域だったことが裏付けられる。そして、茨城県の児童の中でも、入選者が水海道、若柳、五箇と、すべて県西部の小学校の児童であったことは注目される。一等にはピアノが贈られることに

なっていたが、一等入選者4人による抽選の結果、荒井貞子が通う若柳尋常小学校にピアノが贈られている。

茨城県の中でも、西部が童謡や自由詩が盛んだったことは、『赤い鳥』の投稿欄からもうかがえる。童謡教育が最も盛んだった1921年（大正10）と翌大正11年の『赤い鳥』誌上の茨城県入選児童の小学校は表3のとおりである。

表3 大正10年、11年『赤い鳥』入選児童小学校

大正10年	童謡	若柳小（8）、石下小（8）、中結城小（1）、五箇小（1）、下妻小（1）、菅生小（1）
	綴方	若柳小（3）、石下小（1）
	自由画	石下小（2）、大津東小（1）
大正11年	童謡	中結城小（37）、大宝小（17）、若柳小（17）、五箇小（5）、石下小（3）、水海道小（1）、田井小（1）
	綴方	若柳小（5）、大宝小（4）、石下小（2）、中結城小（1）

備考：カッコ内数字は入選作品数

表3に挙げた小学校のうち、菅生小学校は北相馬郡、大津東小学校は新治郡、田井小学校は筑波郡<sup>5)</sup>だが、他は県西部の真壁郡、結城郡の小学校である。

表3に示したように、童謡・自由詩の入選者数は、若柳小学校、中結城小学校、大宝小学校が抜き出ている。若柳小学校（騰波ノ江小学校）は大正12年が59、13年が43<sup>6)</sup>、中結城小学校は大正12年が34、大宝小学校は大正12年が37、13年が31と、この後もこれら茨城県西部の小学校は童謡・自由詩で活発な活動を展開していく。

こうした事実は、『赤い鳥』が創刊されて童謡・自由詩が作られるようになって間もない時期に、茨城県西部の子どもたちが、日常的に童謡・自由詩などに接していたことを示している。平野婦美子の『女教師の記録』の中の子どもたちが、貧困の中で下着もまともに身につけることができず、垢にまみれて虱に苦しんでいた時代に、そして雑誌という言葉すら知らなかった同時期に、茨城県西部の子どもたちは、童謡や自由詩に親しむことができるような生活環境の中にいたのであろうか。

茨城県西部は、土地に占める耕宅地面積が多く、畑と水田が土地のほとんどを占めている。児童の童謡創作が盛んだった大宝村と騰波ノ江村は、ともに水田比率が面積の約半分を占め、畑を加えた耕地面積では90パーセント弱にまでいたっている<sup>7)</sup>。米麦を主生産品とし、養蚕を副業にした農家がほとんどの農村地帯だった。

茨城県西部の農村地帯は、小作地率が高いことも特徴である。1929年（昭和4）の小作地率は、下妻町53パーセント、大宝村75.5パーセント、騰波ノ江村60.4パーセント、豊加美村70.9パーセントであり、茨城県平均の51.4パーセントと比して小作地率が高かった<sup>8)</sup>ことがわかる。特に、小作地率が70パーセントを超えていた大宝村と豊加美村では、耕作する土地の90パーセント以上が自己の所有地である自作農家は、わずかに10～15パーセントに過ぎず、大部分の農家が小作農であった<sup>9)</sup>。

茨城県西部の農村の生活を伝えてくれる小説に、茨城県岡田郡国生村（現常総市）に生まれた長塚節（1879-1915）の『土』がある<sup>10)</sup>。そこには、次のように小作の生活が描かれている。

勸次の田畑は晩秋の収穫がみじめなものであった。それは気候が悪いのでもなく、又土地が悪いのでもない。耕耘の時期を逸して居ると、肥料の缺乏とで幾ら焦慮つても到底満足な結果が得られないのである。貧乏な百姓はいつでも土にくつついて食料を獲ることにばかり腐心して居るにも拘はらず、其の作物が俵になれば既に大部分は彼等の所有ではない。其の所有であり得るのは作物が根を以て田や畑の土に立つて居る間のみである。小作料を拂つて畢へば既に手をつけられた短い冬季を凌ぐ丈のことがともすれば漸くのことである。

茨城県西部に生まれ育った長塚節が見た小作農の窮乏ぶりが、なまなましく語られている。こうした現実には、小学校の教員も実感していた。猿島郡長田尋常高等小学校訓導豊張末治は、窮乏する農家の子どもの不就学の現実と生活実態を次のように伝えている<sup>11)</sup>。

然らば不就学及び缺席の理由は何れにありやといふに、其の多数は保護者の貧弱であるといふ事に歸着するのである、中には先天的病的の者、又は發育不完全の爲め就学し得ざるものもあるがこれは極めて少数である、如何に無教育な父兄でも其の子に人並の教育を受けさせたいといふことは、人から催促されなくとも、又法令上から責められなくとも百も承知して居るのである、而しながら、如何にせん其の資力に乏しく貧弱であつて、其の日々の生計にすら困難であるために、不本意ながら最愛の子をして、不就学並に缺席といふ事実を生み出さしむるのである、出したいのは山々なれど生活の困難なるために學用品を買つて與ふことも出来ず、學校へ着せてやる着物も無く或は辨當の用意さへ不如意であるやうな、實に憐れな境遇にあるものが随分あるのである、或は子供が大勢であつて、父母の足纏ひ手纏ひになつて、それがために生活の資を得る勤勞に従事する妨げとなる

といふやうなものもある、又父兄だけの働きでは到底家族の生活を支へて行くこと能はざるために、少しでも仕事が出来るやうになると、學校を休ませて仕事をさせ幾分なりとも生計を補助せしむるといふやうな事實もある、かくの如く其の原因は主として保護者の貧弱であるといふことに結論せられるのである。

「學用品を買つて與ふことも出来ず、學校へ着せてやる着物も無く或は辨當の用意さへ不如意である」家庭は、長田尋常高等小学校訓導豊張末治が見た茨城県西部だけの現実ではなく、同時期の多くの地域にみられたことである。雑誌の存在を知らなかった千葉県袖ヶ浦の平野婦美子の学級の子もたちの生活と、豊張が目の前にしていた子どもたちの現実には大差なかったであろう。それにもかかわらず、全国的に知られる童謡・自由詩の盛んな地域として茨城県西部が注目されるようになった理由を探るため、次にこの地域の教育環境、文化環境を確認していく。

## 2 茨城県西部の子どもの文化環境

### 2-1 (1) 県西部の教育風土

茨城県は野口雨情、横瀬夜雨らの詩人や長塚節のような文学者を輩出するという文学的土壌が豊かな土地である。これらの文学的土壌は、この地の童謡・自由詩運動の土壌ともなっていたことは容易に想像できる。

この他に、茨城県西部で童謡・自由詩が盛んになった理由として、この地域の教育風土が考えられる。北原白秋は、茨城県や山梨県の子もたちの作品が『赤い鳥』に多数投稿されたことを指摘しながら、「それ等の地方が進取の氣に富み、時代の芸術教育に共鳴するところ多かつた」と述べていた。茨城県西部の教育は、まさに「進取の氣に富」んでいた。

周知のように、明治期の教師主導による知識の画一的な注入主義的教育から、大正時代になると子どもの内発的な動機を大切にした児童中心主義

的教育、いわゆる大正自由教育が隆盛した。茨城県でも、県西部の結城郡石下町（現常総市）の石下尋常高等小学校を中心に、自由教育の動きが盛んになる。その中心になったのは、1920年（大正9）に29歳の若さで主席訓導に迎えられた湯沢卯吉である。

従来の教育の革新を目指す湯沢は、茨城県師範学校からの友人中島義一との交流を通して千葉県師範学校附属小学校の自由教育に関心を寄せる。1921年（大正10）12月28日から3日間、千葉県師範学校附属小学校主事で自由教育の提唱者として知られていた手塚岸衛と、千葉県師範学校附属小学校訓導の中島義一と石原孝蔵の3名を呼んで自由教育研究会を開くことを企画している。この企画は、郡市長会議で自由教育に対する反対の見解を公表していた守谷源次郎知事による研究会差し止めの指令により中止されるが、この後も石下では自由教育熱が冷めることはなかった。

湯沢卯吉を中心に倉持豊三郎、増田弥太郎、鈴木悟郎、栗野弥作、栗原真平といった若手教師たちが研究を深めていく。こうした若手教師たちを中心に、学級の自治会活動の充実、芸術教育の実践、最新の体育指導の実践を行っていく<sup>12)</sup>。その他、青年教育、社会教育も活発に行われていく。

千葉県師範学校附属小学校の影響を強く受けながら展開された石下の自由教育だが、千葉県師範学校附属小学校の実践には見られない石下の自由教育の特色も確認できる。それは、地域社会と学校との関連の深さである。1920年（大正9）に石下尋常高等小学校に赴任した倉持豊三郎は、石下小学校の教育について次のように回想している<sup>13)</sup>。

その頃の石下小学校の教育は、いわゆる新教育と言われるものであった。児童の自学、自発活動、教師と生徒との一体、町に進出しての教育、町民にとけこんでの全町の教育であった。あの頃の教育をなつかしむ町の人たちの気持もわかる。

『赤い鳥』をはじめとするこの時代の児童芸術運動は、童謡、童話だけでなく、児童劇や童謡舞踊などさまざまな芸術として展開されていたが、石下では、教師と生徒と町民がともに農閑期にそうした多様な芸術を楽しむ「部落学芸会」を行っていた。倉持は部落学芸会を次のように回想している<sup>14)</sup>。

これも一つの生徒たちの自治活動である。部落持ち回りで行なわれたが、開催の日には上級生が先にたって、一年生までリヤカーを引いて学校からベビーオルガンや掛図などを運ぶのであった。開会は夕方、その部落の児童全員が出演した。うちの子どももやるというので各家からは留守居を一人くらいおいてほとんどの父兄が集まった。生徒たちの出演が終ると、まず部落担任の先生がお話をし、時には他の先生が時事問題などを話した。私も支那（中国）の情勢などを話した記憶がある。

終わってから、大方の部落では先生方に簡単な酒肴の用意をしてくれた。

石下小学校が中心となって石下町全体が多様な芸術を楽しむ風土が形成されていたのである。

こうした教育風土は、どのようにして茨城県西部に広がっていったのだろうか。五箇小学校で童話、自由詩や綴方教育を展開した増田実は、「当時、お互い近隣学校の交流が行なわれていたかという、決してそうではない、むしろ教師個人の親愛度が、文集の交換やこども達の作品交換に示されていた」<sup>15)</sup>と述べている。茨城県で大正から昭和にかけて自由詩、綴方教育を活発に展開し、羽田松雄、吉田三郎と共に茨城の「三田」と称された増田実は、学校単位での交流による自由教育や芸術教育の広がりではなく、教員個々人の交流と共鳴が茨城県西部に童謡・自由詩の文化を根付かせていったと感じていたことを述べているのである。

教員間の交流が茨城県西部に芸術教育を広げた

組織として、茨城童謡会つばめ社の存在に注目する必要がある。当時の童謡教育に教師として関わった羽田松雄は、「縣下童謡教育界の残骸」と題したエッセイの中で、つばめ社について言及している。

羽田は、「童謡教育の満潮期は何といても大正十、十一年を中心とした猛烈な童謡復興運動の飛沫である」と述べた上で、次のように続けている<sup>16)</sup>。

この時早く、常南「茨城童謡會」の出現を見る。大正十年六月。童謡講演會を水海道小學校に開く。蓋し本縣最初の試み。日本童謡會とんぼ社の、都築、加田、山田氏をはじめ、野口雨情氏、霜田史光氏、藤森秀夫氏等堂々斯道の大家を揃へ、これにわが「茨城少年」主幹、宇佐美駿氏（故人）を加へて、空前の叫びをあげた。但しこの我鳴りは知る人ぞ知る。まことに意義深かるべき筈の研究講習が、叩けど開かれず？物質的にも不経済な消費で終つたとしか思はれない。なぜなら、聴くべく期待に燃ゆる仁のあまりにも影淡かりしこと、況やその反響、波紋に於ては…。然し、全く無意義な叫びではなかつた。即ち、つばめ社の誕生、機関誌「つばめ」の創刊と、事業はとんとんに進捗。蔵田茂夫、高橋徳三郎、栗原真平、外六名の社員が顔を揃へ（勿論小生もその尻馬に乗る）生れて初めての雑誌編輯に大汗をかく始末。今にして思へば、思想的の統一を缺いた、云はゞ雜種結合で、熱も流行熱、さめれば三號は愚か、完全に創刊號兼終刊號で終つてゐる。—これさへ何の不思議はないのである。

羽田が、「聴くべく期待に燃ゆる仁のあまりにも影淡かりしこと、況やその反響、波紋に於ては」と述べているように、茨城童謡会が発足した当時は、反響に乏しく活動が広がったとは言えない状況だった。ただ、茨城童謡会の結成を機に、自由教育と芸術教育の推進に熱意を燃やす若手教

員が結集したことの意味は大きい。茨城童謡会の結成による直接的な影響は少なかったが、人と人とのつながりは強固になり、県西部内で教育観の近い教員たちのつながりが形成されていく契機となったことは評価してよい。

名を連ねた石下小学校の栗原真平、湯沢卯吉と、五箇小学校の羽田松雄、さらに増田実らは、『赤い鳥』誌上でそれぞれの学校が童謡・自由詩教育に力を入れていることを知ってその指導する教員の存在を意識し、石下小学校が主催した教育講習会やつばめ社などで知己を得て親しく交流を重ねながら、県西部のさまざまな学校での芸術教育の展開を推進していくことになるのである。

## 2-（2）栗野柳太郎について

次に、芸術教育を推進した茨城県西部の教師の活動について、若柳小学校で童謡教育を推進した栗野柳太郎を例に確認する。

茨城県西部には、大正自由教育の洗礼を受けたり、自らが文学に興味を持つことから子どもたちに童謡や自由詩を創作させたりした教師たちが多数存在していた。石下小学校の栗原真平、大宝小学校の吉田三郎、中結城小学校の佐藤博、五箇小学校の羽田松雄と増田実らである。

これら茨城県西部で活動した教師たちのうち、全国的に注目される活動を展開したのが若柳小学校の栗野柳太郎（1898-1985）である。栗野は、1898年（明治31）に茨城県真壁郡騰波ノ江村若柳に生まれている。1915年（大正4）に茨城県立下妻中学校を卒業後、若柳尋常小学校で代用教員になっている。大正7年に正訓導になり、その後竹島小学校、下館小学校、大宝小学校に勤務し、1935年（昭和10）に騰波ノ江尋常高等小学校の主席訓導になり、翌年校長に昇進して1938年（昭和13）11月に退職している。

栗野の退職は依願退職である。1938年（昭和13）6月末から7月初めにかけての集中豪雨で、6月30日、騰波ノ江小学校の学区内を流れる小貝川の堤防が決壊し、真壁郡の騰波ノ江、大宝両村

のおよそ500戸が濁流に浸かり、多数の死傷者を出すという大惨事が起こる。学校は1ヶ月ほど避難所として使用され、栗野をはじめとする全職員は教室に宿泊して避難民の救護や復興対策を不眠不休で行う。村のために自己を犠牲にしながら奮闘していた栗野だったが、洪水の見舞い金と救援交付金などに関する村長の汚職に連座した疑いを持たれてしまう。村長の依頼を受けて文書を代筆したことの責任をとっての依願免職を余儀なくされてしまったのである。

栗野は正訓導になって3年目の大正9年、22歳の時に『茨城教育』438号（大正9年12月号）に、「この一篇は最も文化的使命を有する綴方不振の原因を我々教師自己に歸して、反省したものとあります」と前置きした「綴方に對する教師の反省」という一文を寄稿している。

そこには、教師の反省を①教師の綴る力を養うこと、②子供に還ること、③作文意識の改造、以上の三題目に分けて書いている。①では、教師が子どもと同じ気持ちになって綴り方を作っていくことが子どもにとって刺激的であり教師にとっても意味を持つことを述べている。明治期以来の教師主導の注入的教育を否定する栗野の教育観が示されている。②では、「子供には子供だけの躍動した澁澗たる子供の世界といふものがある」と述べ、個性を尊重せず、自由を許さず、子どもたちを型に入れようとしてきた伝統的な綴方を批判している。③では、漢文の伝統に囚われた文章観を否定している。これらを通して、明治期以来の教師中心の注入的教育を否定し、子どもの内発性を重視した児童中心主義にたった、いわゆる大正自由教育の立場での教育を行うことを表明している。そして、『赤い鳥』を中心とした児童文芸運動の中で主張されていた童心主義への共感が表明されている。

以上のような教育観、綴方観に立って、栗野は積極的に子どもたちに童謡を書かせていく。大正10年に子どもたちの作品を載せた謄写刷りの『ワカバ』を発刊し、こうした活動の蓄積のもとに、

1922年（大正11）3月に『蝙蝠の唄』を米本書店から刊行している。

当時の若柳小学校は約200名の全校児童がいたと言われているが、『蝙蝠の唄』はそれらの児童の作品を集めた日本で最初の子どもの童謡集であった。荒井貞子がカルピスの懸賞募集で一等入選し、『赤い鳥』にも多数掲載されるなど、若柳小学校での栗野の童謡教育は次々と成果を挙げていく。

こうして精力的に童謡教育を推進していった栗野だが、この間、大正11年から翌年にかけて、童謡か自由詩かをめぐるいわゆる「夕焼論争」の中で、栗野の童謡観は茨城県西部で自由教育を推進していた、羽田松雄、吉田三郎、中山省三郎、栗原真平、佐藤博の夕焼社同人から批判されることになる。この論争は、中山省三郎が『夕焼』第5号（大正11年5月）誌上において、野口雨情や栗野の童謡観を痛烈に批判したことを契機とした論争である。

中山は、『蝙蝠の唄』の編集を手伝った人物だが、次第に童謡観の相違が鮮明になり、栗野のもとから去っていった人物である。中山は、情操教育の一つとして童謡をとらえる栗野に対し、童謡は情操にとどまらず児童の生活全てであると考えべきだと主張している。また、野口雨情の影響を受けて韻を含んだ歌える童謡という型を重視する栗野の方法に対して、子ども自身が持つ内在的な表現形式を重視すべきだと主張している。さらに、栗野の客観的写実から主観的童謡への発展という考え方にも批判を加え、写実的な童謡の創作にこそ価値があると主張している。中山の主張は、音の調子を重視する童謡から脱却して、自由詩の創作へ向かうべきだとするものであり、同時に情操教育の一環として展開されていた童謡教育に対する批判ともなっていた。

夕焼論争の後も栗野の童謡教育への情熱は衰えることはなく、下館小学校に移ってから、『みづすまし』『ひまはり』『紅椿』『草笛』などの学校文集を出して子どもたちに綴方や童謡を書かせ

たり、1928年（昭和3）9月23日には真壁郡教育会下館部会の事業の一つとして、東京高等師範学校附属小学校訓導の千葉春雄を招いて綴方研究会を開催したりしている。

だが、教師生活晩年の騰波ノ江小学校校長時代に、茨城県の指定で「学習の能率化」の研究校になると、その時の実践を退職後の1940年（昭和15）に『皇民練成・能率教育の実際』という本にまとめるなど、かつての自由主義教育の信奉者から、時節に合わせた教育思想家へと転換していく。

栗野という教師について、茨城県の教育史を研究した石塚哲次郎は、次のように総括している<sup>17)</sup>。

千葉春雄がその将来を嘱望し“たゞ思想の変節をたっとんで行くことだ”と呼びかけたことを、栗野は貫き通せなかった。天皇を中心とした国家主義・軍国主義の大きな時代の流れに飲み込まれてしまったのだが、栗野の体内にあった思想の不徹底さ、リベラルなものを如何なる条件の中でも守り抜く強い意志と知性の欠如にも起因するであろう。返す返すも残念なことであった。

栗野の生涯を振り返ると、石塚が見るように「思想の不徹底さ」のために「国家主義・軍国主義の大きな時代の流れに飲み込まれてしまった」という評価は首肯できなくはない。だが「思想の不徹底さ」というよりは、時代が求める教育の潮流と向き合い、時代の最先端の教育を追求することに誠実だった、と表現する方が、栗野という人物とその教員人生にはふさわしいのではないか。

芸術自由教育が勃興すると、いち早くそれを取り入れて子どもたちに与え、童謡の時代から自由詩や綴方の時代になると、綴方の研究に注力する。そして、国家主義の教育が強まると、皇国民教育の在り方を追求する。

このように、それぞれの時代が求める教育と誠実に向き合い、それぞれの時代の中で成しうる最

大限の努力をして教育活動を展開した教師、それが栗野柳太郎だったのである。

#### おわりに

『赤い鳥』の創刊を機に童謡・自由詩が盛んになった時代に、全国から注目された茨城県西部について概観してきた。

今回触れることはできなかったが、茨城県西部では、多くの教員たちによる学級・学校文集の発行や、学級文庫の設置など、芸術教育が豊かに展開されていた。また、茨城県教育会が発行した『旭一課外の友一』は、県の教育会が発行した児童文芸雑誌として全国的にも珍しいものであった。

さまざまな教師たちの具体的な活動の様子や、茨城県の子どもたちが接した雑誌、発行された学級文集などについては別稿にまとめたい。

#### 【注】

- 1) 平野婦美子『女教師の記録』 国土社 1994年 17ページ
- 2) 関英雄『体験的児童文学史 前編—大正の果実—』 1984年 理論社 91～92ページ
- 3) 2005年、町村合併により真壁郡は消滅。
- 4) 北原白秋『鑑賞指導 児童自由詩集成』（『白秋全集』33 1987年 岩波書店）10ページ
- 5) 2006年、町村合併により消滅。
- 6) 若柳小学校は、1923年（大正12）5月に数須尋常小学校と統合されて騰波ノ江尋常高等小学校が創立されている。
- 7) 『下妻市史』下 下妻市役所 1995年 205ページ
- 8) 前掲『下妻市史』下 231ページ
- 9) 同前
- 10) 長塚節『土』 春陽堂 1912年 91ページ
- 11) 豊張末治「不就学及び欠席の救済策に就て」（『茨城教育』第422号所収）1919年8月 21ページ
- 12) 『石下町史』 石下町 1988年 937ページ



- 13) 倉持豊三郎『私と教育』 1977年 93ページ
- 14) 前掲『私と教育』 95ページ
- 15) 増田実『石下の自由教育—大正教育史の一側面—』 崙書房 1978年 93ページ
- 16) 羽田松雄「縣下童謡教育界の残骸」(『茨城教育』第551号所収) 1930年8月 110～111ページ
- 17) 石塚哲次郎『資料で語る 茨城の教育遺産』  
Ⅲ 筑波書林 1991年 68ページ

